

イスラム金融の系譜/現況と日本

2009年1月14日 北村歳治

はじめに

イスラムの正月：西暦の2009年の元日と2008年12月29日からスタートするイスラム暦の元日が接近（3日違い）。イスラム暦では、西暦2009年はイスラム暦1430年。

$$(2009 - 622) \times 365 / 354 \approx 1430$$

1. 現代的なイスラム金融に対する認識

- 中東での動き
- 東南アジアの動き：1970年代初めのマレーシアを筆頭に、イスラム国であるインドネシア、ブルネイ等。非イスラム国であるシンガポールが動き出したのが2000年前後。
- 東アジアを北上
- 日本の金融機関
 - ①国際協力銀行（JBIC）：
 - ②三菱東京UFJのKL現法：
 - ③住友三井のロンドン現法：
 - ④野村証券のサウジ進出：

2. イスラム金融を支えるイスラム社会

- 世界の人口60数億人のうち、イスラム人口は20~25%、しかも人口増加率が高い。
- 日本のイスラムに対するエクスポージャーはきわめて低い。

3. イスラム金融の系譜

- (1) 現代のイスラム金融は、1990年代以降、急速に拡大。

- ①通常の金融 (conventional finance) の後追い。
- ②しかし、かつては、商業算術、経営組織、商業・取引のノウハウ等の分野で先進的。古代宗教の中では、例外的に商業を重視し利潤追求を是認。アッバース朝 (750~1258) の時代には、経済・商業が繁栄。イベリアでイスラム数学を学んだローマ教皇シルベスター2世 (950~1003)、ヨーロッパの数学の草分けとなるフィボナッチ (1170~1250) 等々。
- 経済用語の tariff, check, cost, あるいは traffic 等の語源はイスラム。

(2) イスラム金融の特徴

- ①利子禁止：利子一般とされているが、これにはイスラム関係者からも強い批判。
- 古代の静態的な社会、キリスト教のスコラ哲学も厳しい禁止論。その理由。
 - ムラバハという手法による利子と同様の効果を持つ mark up / cost up は、実態は利子。
 - イスラム金融の大半は、利子の名称ではないが実態は利子という批判も。
 - 一般的な禁止論は、1960、70年代のイスラム回帰、Islamization の過程で。
 - イスラム金融における損益分担の PLS の理念の追求の代わりに、通常の金融の追随。
 - 日本の金利制限。
- ②シャリア・ガバナンス
- 通常のコーポレート・ガバナンス (due diligence, due process, fiduciary duty と accountability) は、イスラム金融機関についても同様。
 - イスラム金融機関では、通常取締役会と並んでシャリア審査会。
 - シャリア審査会の位置づけの問題。
 - もちろん、シャリア解釈と統一の動きも。BCBS、IOSCO、IAIS に IFSB が対応。IASB、IAASB に AAOIFI が対応。
 - PLS に伴うガバナンスの問題
- ③金融仲介機能と送金・資金決済機能。後者について金融セクター外のハワラ。
- 互いに知り合っているビジネス関係者間での信頼関係に基づくビジネスモデル。
 - SWIFT と機能的には似ているが、多くの国では違法行為という位置付け。
- ④イスラム銀行特有のガバナンスの問題
- ⑤イスラム金融に対する評価

4. 最近の金融危機によるイスラム金融への影響

(1) イスラム金融の資産規模

(2) 今次の金融危機がもたらす影響

①一般論

- 欧米の金融機関のように流動性の枯渇問題はほとんどなし。
- 低いレバレッジと証券化商品への低いエクスポージャ。
- しかし、間接的には進行中。特に、原油価格の急落のボディブロー。
- 個別的には、ドバイ問題の指摘。 **Gulf Enron** とされるような報道も (*Economist*, 2008/11/29)。

②通常の金融とのデカップル?

- イスラム金融の資金の入り口段階、出口段階。
- イスラム金融と通常の金融の提携的な側面。共同投融资。イスラム債 (スーク) の引受け機関。入口と出口の間のパイプ役の問題。
- イスラム世界との間で数少ない会話のチャンネル。
- イスラム金融商品が通常の金融商品を追従 (**smoke and mirrors**)。イスラム金融の方が優位に立つということはありません。
- 経済金融の先行きが不透明な時には不確定要素の回避。
- イスラム経済圏の企業の財務内容・取引の透明性の問題。保坂修司氏の岩波新書の「サウジアラビア—変わり行く石油王国—」。

5. イスラム金融の周辺の問題

①オイルマネーとイスラム金融

- **globally footloose and nationally rootless**
- オイルマネーのフローとストック (フローは1兆ドル、ストックは4兆ドル?)

②ドル・ペッグの為替政策

- 円高を別にすれば、ドルは最近時は他通貨に対して強含みで推移。GCC 諸国の安堵感。
- ドル安の状況下では交易条件が不利になり、ドル高の下では有利。ユーロの勢いが強かった時には、原油価格をユーロ建てにという議論。既にクウェートは、ペッグ制から離脱。
- GCC の内部でも様々な見方、2007 年末の状況で辛うじてドルペッグを維持した経緯。

③出稼ぎ労働者問題

- 中近東あるいはロシア・カザフスタンで周辺の新産油国のイスラム教徒の出稼ぎ労働者。
- 国民所得に相当のシェアを占める出稼ぎの仕送り金は、マクロ的な経済問題。最近訪ねたマレーシア<インドネシア・ネパール・バングラデッシュ・ミャンマー・ベトナムからの出稼ぎ労働者>、中央アジア<ウズベキスタン・キルギスタン・タジキスタンからロシア・カザフスタンへの出稼ぎ労働者>で実感。一番脆弱な輪 (リンク) にシワ寄せ。